

# 植民地時代における朝鮮文学

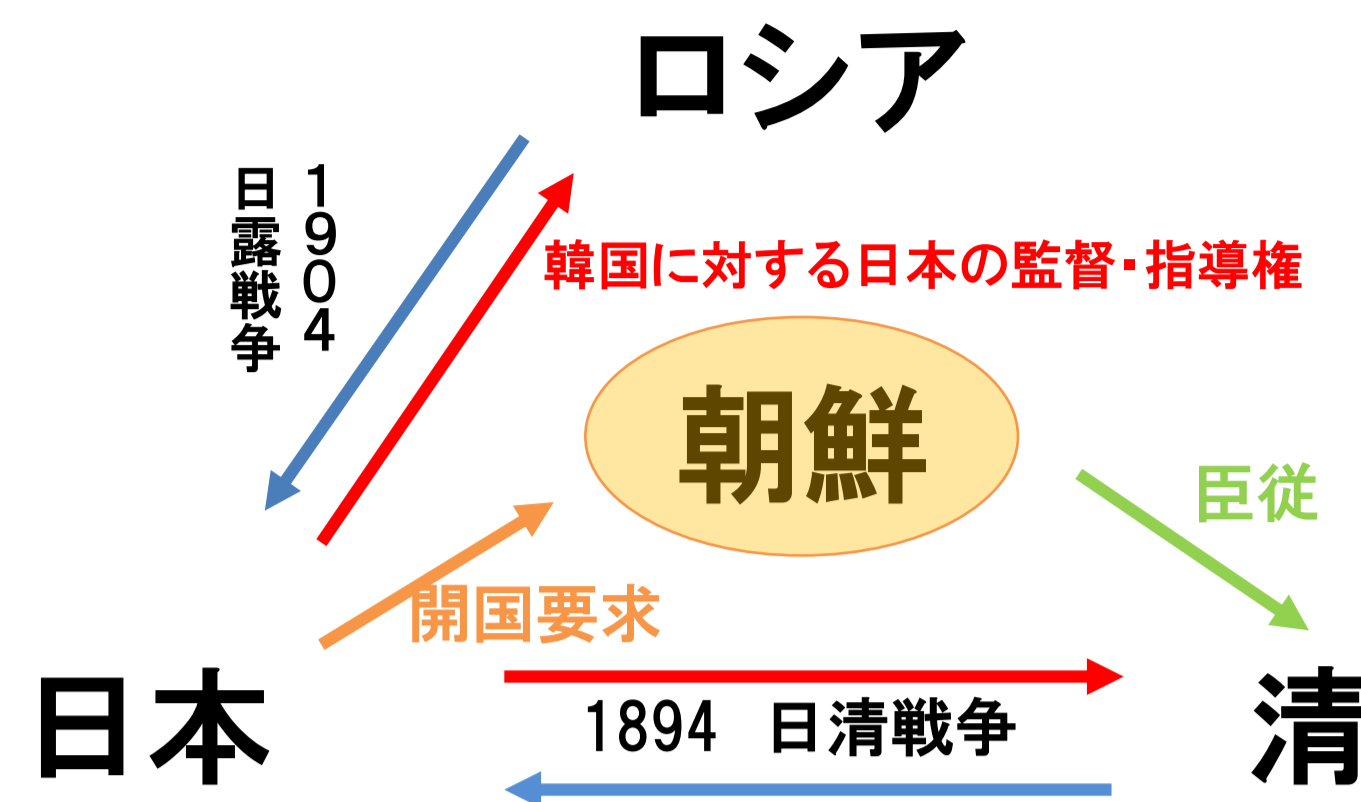
平成30年度 3年3組(17) 神野 遥奈  
指導 法文学部人文社会学科 池 貞姫

## 目的

朝鮮の歴史的背景が社会や文化、人々の生き方にどう影響を与え、文学作品に反映されたかを、植民地時代の朝鮮文学を事例として考察する。

## 植民地時代に入るまで

日本は1853年の開国以降、欧米列強と結んだ不平等条約を改正し、対等な関係を築くため、国力の発展を進めていた。一方、朝鮮は17世紀以降、清に臣従の礼をとり鎖国政策をとっていたが、1876年に日本が日朝修好条約を結び開国させた。



## 朝鮮の時代背景

- 1910 8.22 **『韓国併合ニ関スル条約』の調印**  
大韓帝国は消滅し、日本の領土の一部の「朝鮮」となった。朝鮮総督府が設置、総督は天皇に直隷するものとされ、朝鮮半島における司法・行政・立法の権限を持った。
- 1910 土地調査事業の開始  
地稅賦課の基礎となる土地の測量、所有権の確認を朝鮮全土で実施。未申告の土地は国有地に組み入れられ、日本企業や農業移民に払い下げられ、朝鮮農民の生活を圧迫した。
- 1919 3.11 **三・一独立運動始まる**  
民族自決の国際世論の高まりを背景に学生・宗教団体を中心に朝鮮独立を求める大衆運動で現在でも、朝鮮人のナショナリズムの原点となっている。運動は平和的・非暴力的なものであったが朝鮮総督府は軍隊などを動員し厳しく弾圧した。
- 1920~ **文化政治への転換**  
三・一独立運動以後、民主主義への譲歩、朝鮮語新聞などの創刊が認められ、映画やラジオなど新しいマス・メディアや歌謡曲といった文化が誕生。  
社会主義思想の伝播と受容  
日本資本進出の本格化と朝鮮人資本の従属的成長
- 1920 産米増殖計画の実施  
1918年日本で起こった米騒動を機に、稲作が盛んであった朝鮮で日本市場に適した品種に転換、増産し日本へ移出しようとした。
- 1931 満州事変
- 1937 日本、中国との戦争を開始。  
**『皇民化政策』**を進め、戦時体制への動員を求めた。
- 1938 朝鮮教育令を改正。  
朝鮮語教育を廃止し、日本語常用運動が展開された。
- 1939 創氏改名が実施。
- 1945 8.15 日本の連合国への降伏による植民地解放。  
朝鮮は日本の降伏とともに北はソ連軍、南はアメリカ軍によって占領された。
- 1948 南の大韓民国、北の朝鮮民主主義人民共和国が成立。



←1920年代の朝鮮総督府



←1920年代の京城(現ソウル)駅

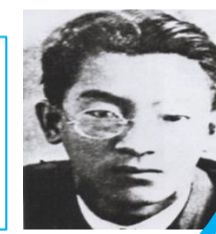
## 朝鮮文学

『洛東江』  
「ある年の早春、この地を離れて遠くに西・北間島に追われゆく一群の人々が、最後にこの川を渡るとき、そのなかの一人の青年が船べりをたたきながら、ものわびしげにこの歌をうたっては、ただでさえ悲しく故郷を捨てていく人々の涙をしばったという。」(P217L2)  
→土地を失った農民は中国国境の間島へ向かい、1910年代末期には40万人近い朝鮮人が移住していた。こうした間島は独立闘争の根拠地となった。

趙明ヒ (1892~42)  
1919年日本の東洋大学に入学。23年帰国して記者生活。28年ソ連に入り教員生活を送りソ連で生涯を終えた。

『答刑』  
「今の彼らの頭には独立もなく、民族自決もなく、自由もなく、いとしい妻子も父母も、あるいは暑さを感じず新鮮な神経さえない。重い空気と暑さに苦しみさいなまれ、頭蓋骨の中に小さくちぢこまった彼らの疲労困憊した脳に、たったひとつの願いがあるとすれば、それは一口の冷水だった。」(P16L13)  
→三・一独立運動により投獄された者たちは日本軍による厳しい弾圧と劣悪な環境に置かれていたことがうかがえる。

金東仁 (1900~51)  
1919年3月には弟が三・一独立運動檄文を書いたことが発覚し4か月間投獄された。『答刑』は作者の実体験が反映されていると考えられる。

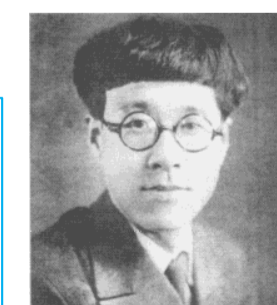


『白琴』  
「不満は一層大きくなった。そんなところへ持ってきて会社の側では夜となく昼となく賃金を下げ一日一朝六時から夜十時一稼いで何十銭、せいぜいでも一円にしかならなかったが、それでは到底食べていけなかった。」(P191L2)  
→労働者数は急増したが、労働条件は劣悪で賃金は日本の半分以上、労働時間も十二時間を超えるものが半数近くに上った。  
・「「だんな、どうかおめぐみを」と袋をいっぱいぶら下げて後についてくる乞食もソウルでお目にかかったむしろをまとめて冷え冷えする路上に寝ている人々もソウルで見た。日が経つにつれ看板と電灯ではでに飾ったソウルの内幕が暗く不潔なものに見えてきた。」(P195L15)  
→1920年代ソウルには鉄筋コンクリートの総督府庁舎やレンガ造りのソウル駅など高層の近代建築が建てられた。一方で没落した農民など下層民も都市部に集まっていたことがわかる。

崔曙海 (1901~32)  
間島での農奴生活など自己の体験、放浪する間に見聞きした素材を題材に人間の窮乏を描いた。

『小説家仇甫氏の一』  
「女給が三人、それから次に二人、彼らのテーブルにやって来た。…彼らの名前にはどういうわけか皆「コ」がついていた、それはけっして高尚な趣味ではなかったし、それに時に仇甫の気持ちを切なくさせた。」(P211L9)  
→「内鮮一体」の統治政策の下、皇国臣民化がすすめられ、日本式の名や日本語が使われるなど民族部分の解体が行われていたことがうかがえる。

朴泰遠 (1910~86)  
1910年にソウルで生まれた。1930年に日本の法政大学予科に入学したが中退。朝鮮戦争期(1950)北朝鮮に渡って行き、ピョンヤンで没した。



## 結論

日本が行った植民地政策は1910年代には武断政治、20年代は文化政治、30年代は皇民化政策が進められた。それに伴い、文学にも10年代は厳しい言論弾圧や貧しい下層民の実情が描かれ、20年代は言論統制が緩和され、近代化されていく朝鮮社会と下層民の対比によって植民地政策への批判が強く表れている。30年代は皇民化が行われ、朝鮮の民族部分が解体されてゆく中で厳しい状況下において拠り所を失った作家たちがより自己の内面や周囲に目を向けて文学を表した。

## 考察

朝鮮文学にはその時代背景に応じた登場人物の思想や周囲の環境の特色が表れていることから、国の歴史的背景は文学を書く作者(その状況に置かれた人々)の独自の「内面」「主観性」にも影響を与えると考えられる。そして文学はそのような「内面」「主観性」を形成させた社会的・文化的・歴史的背景の固有性の理解への手段となる役割を果たし、読者の視野を広げ、国・宗教・人種・時代などが違う他者を尊重し、平和な国際社会へとつながると考えられる。

## 謝辞

この研究を指導して下さった愛媛大学法文学部人文社会学科の池貞姫先生、サポートして下さった久門先生、本当にありがとうございました。

## 参考文献

- 大村益男・長璋吉・三枝壽勝編訳 『朝鮮短篇文学集』 岩波文庫 1894
- 秋月望・丹波泉 『韓国百科 第二版』 大修館書店 2002
- 権寧珉・田尻浩幸訳 『韓国近代文学辞典』 赤石書店 2010
- 小野正嗣著 『ヒューマニティーズ 文学』 明石書店 2010
- 山田佳子訳 『短編小説集 小説家仇甫氏の一』 ほか十三編』 平凡社 2006